
微笑みの詩

ここたそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微笑みの詩

【Nコード】

N7833Y

【作者名】

ここたそ

【あらすじ】

スーツ店に勤務する西浦詩衣が、小学校のクラスメート後藤篤紀と偶然再会し自然と付き合うことになる。しかし篤紀には忘れられない女性がいた。

2人の女性の間で気持ちが揺れ動く篤紀と、篤紀の全てを受け入れようと懸命になる詩衣のラブストーリー！。

空白

8時45分。一人暮らしをはじめた時に買った、お気に入りのシヨッキングピンクの目覚まし時計が今日も鳴る。

寝ぼけた目をこすり、天井を見上げる。

レースのカーテンから日差しがさしこむのを何となく眺めている。ふと我にかえる。

そうだもう彼はいないんだ…

毎朝自分に言い聞かせるのが、知らぬ内に朝の日課になっていた。空っぽになった、ベッドの左側を少し眺めた後、詩衣は珈琲を入れるためリビングへと向かった。

通勤ラッシュが少しおさまってきたころ、詩衣は埼京線に乗り新宿へと向う。

4両目にある2番目のドア付近の空席、ここが定位置だ。

平日だというのに、人であふれかえっている改札をぬけ甲州街道を10分ほど歩くと見えてくるそのビルの1階と2階が詩衣が勤務しているスーツ店だ。

少し古くなったそのビルの裏口からエレベーターに乗り2階にある従業員の休憩室へと向う。

少し遅れてやってきた、同期の大川知里おおかわちさとに声をかける。

「おはよう。昨日話してたワンピース可愛いの見つかった？」

「全然だめ。このままだと友達の結婚式に来て行くやつみつかない。ね！次の休日探す

の付き合って！」

2年前、地元の青森から就職のため上京してきた詩衣にとって、同期の知里はじめてできた東京での友達だった。

以来、知里とは仕事の話からプライベートなことまで何でも相談できるよき仲だ。

こんな知里と毎朝他愛もないことを挨拶代わりに話すのが詩衣の楽しみの一つだ。

おしゃべりもほどほどに、30分ほどの朝礼を終えると店内は開店準備に追われ各々が持ち場につく。

詩衣が清掃している焦げ茶色のフローリング

の階段を少し小走りに店長が下りてゆき、自動ドアのスイッチを入れる。

開店前から待っていた客がちらほらと店内に吸い込まれていく。

その客を笑顔で迎えることから、詩衣の毎朝の業務が始まる。

その日もそのように平凡な毎日がスタートした。

この時は想像もしていなかった。

その数時間後に彼に再会することを…

予感

後藤篤紀ごとうあつこのりは、飯田橋にある医療器械メーカーに勤めていた。社員は約300名ほど。その中でも営業を担当している篤紀は、日々都内の医療機関に自社商品の売り込みに通っていた。

その日は9月も下旬だというのに、やけに蒸し暑い日だった。

- のびてきた髪の毛のせいだろうか、地元の青森じゃ考えられない暑さだな -

そんなことを考えながら、篤紀は新宿にある小さな個人病院へと向かっていた。

新しく開発された心電図の導入をあつさり断られてしまい、踏んだり蹴ったりだなと思いながら病院を後にした時、ふと自分の革靴がだいぶ磨り減っていることに気づいた。

どこかで靴を新調し、今日はそのまま帰宅しようと思った。

…ふと篤紀はあることを思い出した。

昨日の同僚の話で、新宿にある若者向けのスーツ店に行ったがなかなか雰囲気がよく価格もお手頃でラッキーだったと喋っていたことだ。

すぐさま篤紀はその同僚に電話をし、そのスーツ店の場所を事細かに聞くと、少しだけ駆け足でその店を目指した。

再会

時刻は夕方5時を過ぎ、会社帰りであろうサラリーマン達でその店は賑わっていた。

詩衣は入り口のすぐ横にある、3段に並んだネクタイ棚の品数を確かめ商品を補充した。

- 今日の売れ行きもおそらく前年比くらいだろうか -
そんなことを思いながら手だけを動かしていた時、どこか懐かしい顔をみかけた。

彼はネクタイコーナーの斜め右にある、革靴が陳列されているスペースで、少し前かがみになりながらタッセル付きの革靴を眺めていた。

なぜだろう、その男性がとても懐かしく感じたがすぐには誰だか思いだすことが出来なかった。

「すみません！」

ふいにその男性が若干興奮気味の声で、右手をあげながら定員を呼んだ。

男性があげた右手からはほどよく筋肉のついた手首と、スーツからすこしはみ出たオフホワイトのシャツがのぞいていた。

詩衣は彼のもとにかけより、「こちらのシューズ履かれていますか……」と言いかけたその時、彼の動きが止まった。

どうしたんだろう…不思議に思い彼をしてみる。

彼は詩衣の細い首筋にかけられた社員証をその鋭い眼差しでみた後、
やっと言葉を発した。

「やっぱり！…西浦だよな？」

焦燥

その声を聞いて、私はやっと気がついた。
男のわりには2音だけ高くしたような、いや…金属音のような声だった。

「…西浦？」

私の反応がなかったので不安になったのだろう。今度は先程よりも少しだけ小さな声で篤紀は詩衣に呼びかけた。

「…久しぶりだね！」

あまりにも急で現実を受け止めるのに必死だった詩衣にとっては、その台詞を絞り出すのが精一杯だった。

それでも詩衣は、心の片隅にずっと前からおき忘れていた感情が身体の中からは沸々と湧き出てくるのを感じずにはいらなかった。

―後藤篤紀は、西浦詩衣にとって初恋の相手だった―

いや、訂正しよう。10年前…当時は自分が篤紀に恋をしているとはあまりにも幼く自分自身気づいてなどいなかった。

つまり、今にして思えば詩衣が恋を意識し始めたのは篤紀が最初の相手だった。

「元気にしてたか？小学校以来だな！」

こっちの気持ちはまだついていけないのを他所に、篤紀は右手で髪

をかきあげながら話しはじめた。

やっとのことで詩衣も少し落ち着き、それから二人はお互いの近況を報告しあった。

その間中、詩衣は懐かしさと…ときめきを感じずにはいらなかった。

進展

池袋西口をパルコ方面へと向かう途中にその喫茶店はあった。雑居ビルの3階にある「砂時計」という名の喫茶店は、マスターがいてくれるキリマンジャロが売りだ。

篤紀は窓際のソファ一席に腰を下ろしていた。

少し冷めた珈琲をすすりながら、窓から見える横断歩道を眺めていた。

土曜日だからだろうか、窓からは子供連れで歩く人が目立った。

「もう一度、今度はお茶でもどうかな？」

西浦詩衣から誘われたのは、新宿のスーツ店で再会したあの日から一週間後のことだった。

仕事を終え、家に着くとまずシャワーを浴びる。その後キンキンに冷えたビールをこれでもかというくらいに一気に飲み干す。

お決まりの儀式を堪能している時にその電話はかかってきた。

正直、意外だった。

あの日連絡先を交換したけれどもまさか本当に電話がかかってくるとは思ってもいなかった。

というのも、篤紀の記憶だと詩衣はどちらかといえば受け身なタイプの女の子だったからだ。

綺麗に雑草が抜かれた小学校の校庭で、6年1組の生徒はよくドッジボールで遊んだ。

いつも自分から友達を誘い一番に校庭に向うタイプの篤紀に比べ、詩衣は誘われるのを待っているような子だった。

だからだろうか…今、詩衣の方から誘われてここに座って彼女を待っているのに少し違和感を感じた。

そんなことを考えながら、珈琲をもう一杯おかわりしようと思スタ
ーの方を向いた時に、ウッド調の扉にかけられたベルが鳴った。

動悸

「すごい！そんな偶然なかなかないよ！」
休憩所に興奮気味な知里の声が響く。

「…そうかな？」
ややおっとりとした口調で、そしてちょっとはにかんだような表情を浮かべながら詩衣は返事をした。

「絶対そう！運命だよ運命…早く次合う約束とりつけなよ、鉄は熱いうちに打てって言うじゃん」

せつかちな知里がそのように促がしたことで、詩衣の篤紀に対する気持ちはどんどん膨れ上がった。

運命だなんて信じていないけれど、詩衣にとって知里のその言葉は満更でもなかった。

小学校の頃から何も変わっていない優しい笑顔だった。
見た目は幾分か大人っぽくなり、男らしさが増したせいか見慣れないものがあつたが、あの笑顔だけは詩衣が好きだったころのままだった。

「知里の積極的な性格のおかげで今日会える約束ができたのだから、今度パスタでも奢らなきゃな」
そんなことを考えながら詩衣は喫茶店までの道のりを足早に歩いていった。

シフォン素材の白いスカートがふわりと揺れた。

視線

ウッド調のその扉を開けると、すでに篤紀の後ろ姿があった。
詩衣は髪が乱れていないか手鏡で確認し、さつと薄ピンクのトート
バックにしまった。

「待たせちゃったかな？篤紀くん早いね！」
言いながら詩衣は篤紀の向かいのソファーに腰を下ろした。

「…西浦！生憎、女性は待たせない主義なんだ」
篤紀の瞳がイタズラに光った。
こんな聞いていて小っ恥ずかしくなるような
台詞をさらりと言えるのは、おそらく篤紀くらいだろう。

「今日、意外だった。まさか西浦から連絡くるとは思わなかったか
らさ」

「…そうかな？」
詩衣は自分の頬が赤く染まっていくのがわかった。
照れ臭くなり必死で次の話題へと会話を移した。
「ここよく知ってたね。私は同期の子に連れられてよくこの辺で遊
んでるんだけどさ」

篤紀は一瞬、虚をつかれた。

篤紀にとってこの喫茶店は忘れられるはずのない場所なのだ。

「ああ、大学が池袋だったから…この辺は割と土地勘あるかな」

篤紀がふいに窓の外を眺める。
その視線を追い詩衣も窓からの光景に目をやる。

駄々を捏ねたものわかりの悪い子供の手を引っ張って、歩いている
母親の姿が目に入った。

表情

詩衣にとって、篤紀と話している時間はあつという間だった。

例えて言うとするれば…朝起きて顔を洗う時間くらい。それは本の数分の出来事のように感じた。

その間に二人は数多くのことを話した。浅井先生が結婚したこと、クラス一悪ガキだったタツちゃんが校長先生に怒られ大泣きした時のこと…。

同じ時間を過ごしてきた二人にとって、話題は溢れんばかりにあるのだ。

ふと、一瞬会話が途切れた後、篤紀が思いもよらぬ言葉を発した。

「動物園でも行こうか」

「は…？」

しまった…せめて「え…？」と言うべきだった。それくらいビックリした。驚きの感情が、表情だけでなく声にまで伝染してしまったのだ。

篤紀は一瞬戸惑いの表情を浮かべたが、すぐ様いつものひょうひょうとした口調で話しはじめた。

「お前、はっ…？つて。はは。嫌かな？」

「嫌じゃないよ。嫌な訳ない」

篤紀はまた窓からの景色を眺めた。日が暮れはじめている。きっと今日は満月だ。

「昔さ、クラスで飼ってたウサギ…西浦飼育登板の時いつも楽しそうに餌あげてたよな。」

「嬉しかった。」

次の約束が出来たこと。篤紀から誘ってくれたこと。

しかしそれ以上に、篤紀の思い出の中に確かに自分が存在したことに言葉では言い表せないような感情を抱いた。

そして、自分でも忘れていたような出来事を覚えてくれていたことがたまらなく嬉しかった。

「じゃあ、動物園…次の約束ね！」

その言葉に頷くと、篤紀は髪をかきあげそして優しく微笑んだ。

帰路に着く途中にある歩道橋を登ると、そこからオレンジ色の夕日
が自分を応援してくれているかのように美しい光を放っていた。
詩衣はしばらく夕日を眺めた。

そして踏み出した一歩は、すぐさま影にのみ込まれていった。

奇跡

季節はすっかり移り変わって、朝起きた時の寒さが一層厳しさを増してきた。

青森ではこの季節、当たり前のように雪かきをしている人々が目に付くが、東京ではその様な光景を見ることはあまりない。

代わりに目に入るのは、街にこれでもかと言わんばかりに飾り付けられたクリスマスの装飾だろうか。

詩衣とはほぼ毎週の様に出会っている。詩衣と会うと嫌なこと全てを忘れられる気がした。

靴したに穴が開いたという小さなことから、過去の辛い失恋まで全てのことを…だ。

それが何故なのか、篤紀なりに考えてみた。

おそらくきっと、篤紀といるときの詩衣が余りにも幸せそうな顔をするからだ。

自分がこんなにも幸せそうな顔をさせてあげてるのだ、と悦えつに浸れる。

そんな感情にどっぷり漬かるのは、それほど悪い気もしない。

12月25日。

今日も篤紀は詩衣と時を過ごしていた。外苑の銀杏並木も今日はすっかり純白が似合うイ

ルミネーションと化していた。

「地元だとき、クリスマスに雪が降るなんて当たり前。むしろ大雪

で外に出ようなんて思わない…それがこっちだとこんなに人がこつた返してるんだもんな。不思議だな」

その言葉を聞いて、詩衣は微笑んだ。手にはこんな日によく似合う真っ赤な手袋がはめられている。

「ほんと、カップルばかりだね」

言い終えた後、詩衣は少しだけ羨ましそうな眼差しを篤紀に向けた。篤紀はその視線にドキっとした。これがクリスマスの魔法だろうか。

詩衣を喜ばせたい。そうすればきっと、自分も幸せになれるんだ。そう思い篤紀は自分の想いを言葉にのせた。

「はたからみれば俺だだってそう見えるだろ…何なら本当にそうなる？」

早く詩衣の反応が知りたい。先走る気持ちを抑えようとそっと息を吐く。濁りもなく真っ白だ。

次の瞬間、詩衣の瞳に溢れそうなほど涙が浮かびあがった。それは詩衣の白い肌をより一層引き立たせた。

篤紀は詩衣の柔らかく細い肩を後ろから抱きしめる。

「泣くな！」

少しはにかみながらそう言い放った時、掌に水滴が滴った。詩衣の涙だろうか、それとも二人を祝福するかのようにタイミングよく粉雪が落ちてきたのだろうか…。

12月25日。

東京でも珍しくホワイトクリスマスとなった。

その日は詩衣の24回目の誕生日だった。

日常

翌日の朝出社すると、休憩室には千里のハイテンションな声が響き渡っていた。

まるで昨日の余韻をぶち壊し現実に戻してくれる様な声だな、と詩衣は思った。

良くも悪くも詩衣は千里のそんなところが好きなのだ。

中にはいると、千里が大きく手を振りながら話しかけてきた。

「うーたーえー！誕生日おめでとう！」

誕生日を忘れずに覚えているところに、やはり千里の人の良さを感じる。

「ありがとう！シフト変わってもらってゴメンね」

「ほんとだよ。こっちはクリスマスだって言うのに7連勤中だよ。で、どうだったの？」

詩衣は答えるかわりに、千里の目を真っ直ぐ見つめた。その目は悪戯にひかり期待に満ち溢れている。

詩衣は手で小さなハートマークをつくった。

「やったあー！」

千里は表現しようがないくらいのテンションで、ガッツポーズをした。

そんな千里の滑稽な姿に詩衣も思わず大声で笑ってしまった。

それから詩衣と篤紀は、いつもどちらかのアパートで仕事が終わった後夕食を食べるのが日常となっていた。

詩衣はシフト制のため土日休みが少なく、一方篤紀は暦通りに休日があるため丸一日一緒にいれる日は意外に少ない。

もつと一緒にいる時間が増えればいいのになあと詩衣が言ったところ

ろ、篤紀が毎日夕食一緒に食べようかと提案してくれた。

この日も詩衣の部屋で少し冷めたカルボナーラを食べていた。

「そういえばさ、うたの誕生日っていつ？」

聞きながら篤紀はビールを飲み干す。まだ底に残っていると思ったのか、缶の中をみてあれ？といった表情を浮かべた。

いつのまにか、詩衣のことを「うた」と呼ぶようになっていた。

「12月のねー、25日だよ」

詩衣はカルボナーラをフォークに巻きつける。この作業が地味に好きだった。

「それって…」

「そうあの日」

につこりと詩衣は微笑んだ。頬つぺたにはえくぼが浮かんでいる。肩をつくしと落としながら篤紀は喋りだした。

「ごめんな。何もプレゼントあげられなかったな」

詩衣が首を横にぶんぶんと2回程振ると、篤紀は何かを思いついたようだった。

「そうだ！来年のうたの誕生日には旅行に行こう。俺、それまでに金貯めるからさ。うたの行きたいところに行こう」

目を見開いて、今度は縦に首を振った。

まだまだ先の約束だけど、今からそれが楽しみで仕方なかった。

そして二人は一緒に眠りに落ちて行った。

素直

「何ていうか…すごくいいこなんだよな」

「いや、その表現陳腐すぎるだろ」

すぐさま健人は篤紀に対し率直な感想を述べた。

彼、佐々木健人ささきけんとは篤紀と同じ高校の出身だ。ついでに言うと大学も同じ、さらには学科まで一緒ときたものだから自然と仲良くなった…というよりならざるをえなかった相手だ。

まあとは言え高校の時は話したことさえなかった。こいつの独特の雰囲気というか軽率さが、野球部に所属していたスポーツ少年の篤紀とはそぐわないところがあつたからだ。

しかし、何の因縁か同じ大学に進学することになり渋谷々会話を試みているうちに、見た目ほど悪い奴でもないかもなという気になってきた。

奇抜な茶髪にやたらと長い襟足も今となってはだいぶ見慣れてきた。そんな健人は、卒業後も篤紀の事を月に一度のペースで呼び出し飲み誘う。

今日も誘われて、大好物の砂肝をつまみにいただいている時に詩衣のことを聞いてきたのだ。

「陳腐っていうけどさ、ほんとに俺が望む事全てをやってくれるんだ。いい子としか言いようがないだろ」

「ふーん、例えばやらせろって言ったら速攻でやらしてくれるの？」この男はそういうことしか頭にないのだろうか。

だから、いい歳していつまでもフリーターなんだ。無論、健人に言わせるとフリーターではなく夢追い人ゆめおひびとらしい。全く口だけは達者だ。気を取り直し篤紀は言った。

「何でそうなるんだよ。そういうのじゃなくてさ、俺が仕事遅くなつてそれでも味噌汁飲みたいって言ったら本当に作ってくれたりとかさ…」

「なるほどねー」

そう言いながら健人はニタニタとにやけている。その顔はひどく気味が悪い。

「何だよ？」

何か言いたげな健人に対して篤紀は問いただした。

「そのさ、うたちゃん？まるで華^{はな}とは正反対のタイプだと思ってさ」

誠実

「佐々木健人って…ササケンさん？」

詩衣は携帯電話を右手から左手に持ち直した。

「そうそう、高校の時はあだ名はササケンだったな。詩衣、知っているんだ？」

「知ってるってほどではないけど…名前は聞いたことあるかな」

そう答えながら詩衣は思った。実際は知っているなんてもんじゃない。

詩衣の地元の青森で、健人はちょっとした有名人だった。と言ってもいい方で有名なのではない。悪い方だ。

健人は女癖が非常に悪く、彼女をすぐにとつかえひつかえすることでも有名人だったのだ。当時、市内の女子高生の間では「北高のササケンに気をつける」という合言葉ができたほどだ。

事実、詩衣の高校の同窓生にも数人被害者がいた。

そんな噂があるだけに、篤紀と健人が友人だと聞き正直驚いていた。誠実な篤紀のタイプとは合わないような気がしたからだ。

「それでさ、健人がうたに会いたいって言うてたんだよね」

「それなら…わたしは別に構わないよ。篤紀の友達に会えるのは嬉しいしね。」

少々抵抗があったものの、篤紀の友達に自分を紹介してもらえるのは素直に嬉しい。

それに詩衣は、篤紀の友達がどんな人なのかを知りたいと思った。

「ありがとう。うた今度の日曜日非番だったよな？それじゃあ、その日に健人がバイトしてるバーラウンジに連れて行くよ」

「わかった。…おやすみなさい。」
「…おやすみ。」

詩衣は会えない日にする電話も好きだった。いつもよりも少しだけ低く聞こえる篤紀の声や、普段よりもずっと耳元に近いところで囁かれるのが新鮮だからだ。

電話を切った後、詩衣はそんなことを考えていた。ずっと考えていた。

心がホッカイロみたいに温かくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7833y/>

微笑みの詩

2011年11月30日11時58分発行